

カーシュガルにおけるワクフ ——ワクフ文書集成史料について——

菅原 純

ワクフ (*waqf*) は、一般にイスラーム法のうえでは慈善を目的とする寄進行為、あるいは寄進物そのものをさし、いわゆる「イスラーム世界」を特徴づける制度のひとつである。アラブ世界をはじめ、各地におけるワクフの運用の実態については、これまでおむね制度・法制史および社会史の両面から研究がおしすすめられ、すでにワクフをめぐる学術的な知見には一定の蓄積があると言えるであろう。その一方で、中国・新疆地域のワクフ研究は、主として史料上の制約から情報に乏しく、依然としてほぼ未開拓の状態にある。

そうした状況にあって、今日新疆のウイグル知識人の一部で流通している史料、一名『カーシュガル・ワクフ文書集成』は、これまで断片的であった新疆カーシュガル地区のワクフにつき、ある程度まとまった情報を提供する画期的な史料である。これまで知られていた新疆由来のワクフ関連文書は十指に満たぬ希少なものであったが、当史料は実に 104 のワクフ設定対象に対する 131 文書を収録している。

当史料のタイトル『カーシュガル・ワクフ文書集成』とは、報告者が便宜的につけた仮称であり、史料そのものにはそれ全体を言い表すタイトルのようなものは一切記入されていない。当史料は複写物のかたちで流通しており、原写本の所在は今なお不明である。総頁数は 197 頁あり、そのなかに目次と上述の通り 131 点の文書が記載されている。目次は当史料の冒頭 3 頁に配され、文書番号と文書のタイトルが記されてある。各文書は 1 頁に 1 点の場合も、複数頁にわたる場合も、また 1 頁に複数文書が掲載される場合もありまちまちである。当史料の書体は一定しており、おそらくは同一人物によるものであり、上述の構成からも、またこの均一の書体から考えても、当史料に収められた文書は当然オリジナルではありえない。すなわち、ある一時点でオリジナルの文書を書写し、リストを作成しまとめられた編纂物であると判断される。

当史料の史料としての信憑性については、なにぶん原写本の所在が今もって不明な複写物であるため一定の注意が必要である。これについては現時点では①当史料に収録された文書のうち、原文書 2 点が現在新疆大学人文学院所管の「少数民族博物館」所蔵文書に見出され

ること、②さらに別の2点の文書について、そのワクフの管財権をめぐる訴訟文書をはじめとする補完的な関連文書が別コレクションに数十点現存していることから、少なくとも収録文書が全くの捏造である可能性は排除できるものと考えられる。

収録文書の内訳については、まず目次に記されたタイトルに注目した場合、ワクフ設定対象（聖者廟、モスク、学校等）が記されたものと、ワクフ設定者（個人名）が記されたものの2種類に大別される。ワクフ不動産の所在地に注目した場合、同定できた地名はほぼすべて現在のカーシュガル地区、しかも歴史的カーシュガル、つまり旧城壁内や、比較的カーシュガル市近郊の地域のものが多いことが分かる。さらに年代に注目した場合、最古のものは1770-71年、最新のものは1936年春を下限としており、当史料の成立時期は1936年以降と考えられる。

当史料について、まずきわめて重要な問題として浮上するのは、そもそもこの史料がいかなる目的で、誰によって作られたものであるかという点である。少なくとも当史料を通覧した限りではその種の疑問に答える文言は何一つ書かれておらず、史料そのものからそれを窺い知ることは出来ない。しかし、①当史料に収められた文書がワクフ関連の文書であると考えられること、②ワクフ物件がほぼカーシュガル地域内のものに限定されうること、③収録文書の下限が1936年であること、という3つの事実は、あくまで推測の域を出ぬが、ひとつの歴史的な事実と符合する要素を持っている。

谷苞が指摘するところでは、1935-6年にときの盛世才政府はカーシュガル地区の「ウイグル人市民ならびに進歩的な若者たちの要請」に基づき、在地のワクフ地を接收しそれを「ウイグル族文化促進会」の所有に帰さしめ、同促進会の文化事業の財源として活用させたという。また清水由里子は1934年から37年にかけてカーシュガルを実質的に統治した **Mahmūd Muḥīṭī** の下で学校・ワクフ改良局が組織され、マザール、モスク、マドラサ付属のワクフに対し調査が実施されたと指摘している。これらの歴史事実は当史料の性格と少なくとも矛盾しないものであると考えられる。すなわち、当史料は1936年頃にカーシュガル地区で実施された政府によるワクフの没収過程、あるいはワクフ調査のなかで組織的に作成されたものではないかと推察されうるのである。

当史料はその収録文書数が豊富であり、これまで詳らかでなかった新疆、カーシュガル地区のワクフ事情を解明する有為な情報を多数含んでいる。それは個別的な施設や家族の社会・経済状況はもちろんのこと、よりラディカルには、ワクフに象徴されるイスラームの諸制度の当地におけるファンダメンタルな運用の実態、そして折々の歴史的な諸事象の中でのその変化の問題について、具体的な検討材料を提供することであろう。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フェロー)